

聖書日課 『からし種』 2022.11.6-11.13

<p>11月6日 (日)  レビ記 15章</p>	<p>「祭司は一羽を贖罪の献げ物、他の一羽を焼き尽くす献げ物として主の御前にささげ、彼女の異常出血の汚れを清めるために贖いの儀式を行う」(30節)。「異常出血の病状」は古代の人々に理解不能の怖れを生んだのだろうが、その偏見に苦しめられた女性たちを想う。主イエスの「長血の女」への癒しの宣言がどれほど大きな解放をもたらしたことだろう。</p>
<p>7日 (月)  レビ記 16章</p>	<p>「わたしは贖いの座の上に、雲のうちに現れる」(2節)。十戒の板が収められた「掟の箱」の上に「贖いの座」が置かれていた。私たち人間は「神の前に赦されがたい罪を抱えていること」を忘れないために。けれども新約でキリストが十字架という「贖いの座」につかれたことで、その場所は「赦しがたい罪が赦されている恵み！」を覚える場に変えられたのだ。</p>
<p>8日 (火)  レビ記 17章</p>	<p>「すべての生き物の命は、その血だからである」(14節)。血は命＝神のもの。血を神に返すために地の上に流し、人は血を食べてはならない…という戒めが生まれた。カインが弟アベルの命を奪った時、「お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」(創世記4章)と主は言われた。今日、世界各地で主に向かう血の叫びがあることを覚え祈りたい。</p>
<p>9日 (水)  レビ記 18章</p>	<p>「わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。わたしは主である」(5節)。18章は「いとうべき性関係」がたくさん記されている。いずれも当時、「性」において圧倒的な力を持ち、女性を傷つけていた男性に対する厳しい戒めである。「欲望」が「性」と結びつく時、「愛」ではなく「支配」が生まれることを覚えたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.11.6-11.13

<p>10日 (木)</p> <p>レビ記 19章</p>	<p>「復讐してはならない。…人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である」(18節)。「隣人を愛しなさい」の前に「復讐するな、恨みを抱くな」の言葉がある。ウクライナの司祭が「これだけ深く傷つけられた人々に赦しを語る困難」を語っていた。なぜキリストが十字架にかからねばならなかったか。人間の罪深さを想う。</p>
<p>11日 (金)</p> <p>レビ記 20章</p>	<p>「あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである」(26節)。「聖なる者」とは「清く正しい人、間違えない人」ではない。むしろ「清く正しくなりきれない自分」を知っている人。神の恵みを体験し、「神の恵みを離れては生きられなくなった人」のことである。今日「離れては生きられない恵み」を感じることができるように。</p>
<p>12日 (土)</p> <p>レビ記 21章</p>	<p>「アロンに告げなさい。あなたの子孫のうちで、障害のある者は、代々にわたって、神に食物をささげる務めをしてはならない」(17節)。「旧約」聖書の中には、「新約」のキリストの恵みによって明確に否定されている部分があり、その一つがこの箇所である。「障がい」は決して「災い」ではない。主なる神は「障がい」を通して必ず「神の業」を見せてくださるからである。</p>
<p>13日 (日)</p> <p>レビ記 22章</p>	<p>「あなたたちは牛または羊を屠るとき、親と子を同じ日に屠ってはならない」(28節)。27節から続く、屠られる動物への憐れみが感じられる掟。動物にも親子の絆、痛み苦しみがある。「罪を贖う唯一のいけにえ」主イエス・キリストにより、人の代わりに動物を屠って献げる意味はなくなった。ましてや、人の命が簡単に奪われる世界があっても良いはずがない。</p>